

もっと知りたい！

彫刻

鑑賞ガイド

彫刻の魅力を語るスペシャルギャラリー
トーク。千葉県立美術館に常設展示され
ている、31点の彫刻作品を紹介します。

1 アントワーヌ・ブールデル (1861 ~ 1929) 《聖母子》

- イエス・キリストとその母マリアの像です。二人は「聖母子」とよばれます。第一次世界大戦の戦没者記念碑として造られました。
- こどものイエスは十字架の形をしています。イエスを支えるマリアの腕が高く掲げられ、この形の特徴から、「捧げものを持つ聖母」ともよばれています。
- 「聖母子」像はフランス、アルザス地方の丘の上に、6 mの石像として建てられています。この像はそのための習作の一つとして造られました。ポーズに伴う衣服の流れるような構成が美しい作品です。**ブロンズ**（常設展案内『彫刻』参照）という金属でできています。
- ブールデルの師は**オーギュスト・ロダン**（1840 ~ 1917）です。ロダンは有名な「考える人」を作ったことで知られる偉大な彫刻家です。日本の彫刻家にも、大きな影響を与えました。

2 柳原 義達^{やなぎはらよしたつ} (1910 ~ 2004) 《風の中の鴉》

- この彫刻は「触れることのできる彫刻」です。どうぞ触ってみてください。
- 風に向かって力強くバランスをとるカラスを表しています。ブロンズでできていますが、もとは粘土で作られ、そこから型をとって仕上げています。指で粘土を押さえた跡がそのまま残っています。
- 羽や足の動きが、左右互い違いになっています。今にも動き出しそうです。また、そこから風の強さを感じ取ることもできます。
- 作者の柳原義達は、はじめは日本画に興味を持ち、絵を描いていましたが、ブールデルの彫刻の図版を見て感銘を受け、彫刻家を志したそうです。

3 中島 幹夫^{なかじま みきお} (1933 ~) 《風の肖像》

- 大きなガラスのかたまりを通して、石に刻んだ凹凸に差し込む光の美しさを感じてください。
- 彫刻には、1や2のように人物や動物を生き生きと表したものもありますが、この彫刻のように、石やガラスや光など自然や素材のもつ美しさを表したものもあります。

4 郡司 和男^{ぐんじ かずお} (1930 ~ 1978) 《天使》

- 天使の体のラインや腕や足の太さを意図的に変形したり、強調したりしています。そのせいかどこか不思議な形をしています。
- 粘土で作ったものを、石膏で型に取り、ブロンズに鋳造しています。
- ブロンズにする前の状態のものを**原型**といいます。石膏の適度な硬さを活かして金ヤスリ等で削ったり磨いたりして、原型を完成させます。よく見ると、カッターのようなもので鋭く引っかいたような跡がありますが、これも作品の魅力の一つとなっています。

5 佐藤 忠良^{さとう ちゅうりょう} (1912 ~ 2011) 《ラップ帽》

- 作者は、日本を代表する彫刻家です。公園や美術館、駅前広場などで、よく作品を見かけます。スケッチや絵も描き、絵本「おおきなかぶ」の挿絵も手掛けました。
- ラップ帽とは、耳あて付きの帽子のこと（ラップランド帽）。帽子をかぶった頭部の面の構成とシルエットが美しい作品です。これも「触れることのできる彫刻」です。
- 目の部分には穴が開いています。また、台座もきれいに仕上げずに、適度に粘土の粗さを残しています。作者はどうしてそのように表現したのでしょうか？
- このような人物の首から上の部分を作った彫刻を**頭像**と言います。英語では**Head**と言います。彫刻家の人たちはこれを**首**とも呼んでいます。

6 高田 博厚^{たかた ひろあつ} (1900 ~ 1987) 《ロマン・ロラン》

- ロマン・ロランはフランスの文学者です。作者の高田博厚と交流があり、彼に肖像彫刻の制作を依頼しています。
- 歴史上の偉人等を作ったものを**肖像彫刻**と言います。多くは、本人に似せて作ります。高田博厚は、肖像彫刻を得意としていました。インドの指導者**マハトマ・ガンジー**や童話作家**宮沢賢治**、版画家**棟方志功**、詩人**中原中也**、彫刻家・詩人の**高村光太郎**等の肖像彫刻を作っています。
- 彫刻で取り上げた人物は、必ずしも目の前でモデルをしていたわけではありません。高田は人柄や人格に心を動かされた人物を選び、記憶や写真等を手がかりに、肖像彫刻を作りました。
- この彫刻も「触れることのできる彫刻」です。どうぞ触ってみてください。像の下から手を入れると素材であるブロンズの厚みを確かめてみるができます。

7 菊池 一雄^{きくち かずお} (1908 ~ 1985) 《手を挙げる》

- 菊池一雄は、フランスの彫刻家ロダンの影響を受けた彫刻家の一人で、『ロダン』という本を書いています。
- 28歳のとき（1936年）パリに留学し、ロダンの助手を務めた**シャルル・デスピオ**（1874 ~ 1946）という彫刻家に師事しました。
- 両腕を挙げてできた空間から、足先へ抜ける流れるような量感が心地よい作品です。

8 木村 賢太郎^{きむら けんたろう} (1928 ~) 《うごめくトルソーⅡ》

- トルソ**（トルソー）とは、イタリア語で**胴体**を意味し、人体の手や足や頭部などを表現しない、胴体だけの彫刻のことをいいます。**ミロのビーナス**のように、古代に作られたものが発掘される時は、完全な形で出てくることは少なく、長い年月の間に風雨にさらされたり、地中に埋もれたりして多くが破損しています。しかし、顔や手の表情などがなくなったことで、逆に**形そのものの美しさ**や**おもしろさ**を味わうことができます。
- この作品は石を磨き、かたちを整理して、「胴体」の持つ特徴を表そうとしています。作者の木村賢太郎の彫刻は、屋外に全部で8つありますが、これはその中の一つです。

9 田中 毅^{たなか つよし} (1951 ~) 《草枕の旅》

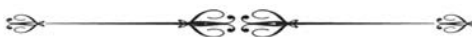
- 「左はスーパーマンのような虫『つよむし』、右は鎧を着衣した虫『鎧犬』で、外敵とも恐れずに戦い、風雨にさらされ、住みよい所を求めて旅をしてきたが、この辺りはどうだろうか？と、見渡している所である。」（※作者の言葉より）
- この作品は**御影石**（常設展案内『彫刻』参照）という硬い石でできています。ざらざら、ごつごつ、すべすべなどの感触を、そっと触って感じてみましょう。

10 藤野 天光^{ふじの てんこう} (1903 ~ 1974) 《銃後工場の護り》

- 戦争の際に、銃などを持って戦場で戦うのではなく、戦場の後方（銃後という）の軍需工場などで働くことによって戦争を支えた労働者をテーマにした作品です。この像がつくられた1938年は、日本が国際連盟を脱退後孤立化を深め、しだいに太平洋戦争に向かう時期にあたります。
- 台座の高さに注目してみましょう。彫刻はいろいろな方向から作品を眺めることのできる芸術です。台座の高さによって、彫刻の見え方が変わってくることもあります。この作品の台座は他のものに比べて高く、下から見上げるようにして彫刻が設置されていますね。働く男性の力強さが一層強調されて見えてくるようです。

11 中岡 慎太郎^{なかおか しんたろう} (1957 ~) 《“FANTASY”》

- この作品は当美術館の人気者です。どこから来たのか？何と言っているのか？あなたは何に見えますか？
- 台座が無く、芝生と同じ高さに置かれているので、一層親しみやすさを感じます。また、レストランからの眺めも格別です。ティータイムにこのユニークな彫刻との対話を楽しんでみませんか？



12 ^{ただ だい} 高田 大 (1958 ～) 《リラックス》

○「すみません。ちょっと休憩します。」と言って、外へ出てリラックス。
煙草に火をつけて、空を見上げて、何を思うのでしょうか？仕事のこと？
家族のこと？明日のこと？
○作品の厚みは20センチしかありません。顔のつくりや服の合わせ目などから立体感が伝わります。石の磨き方の違いで、触れた時の感触も異なってきます。

13 ^{すずき けいこ} 鈴木 啓子 (1939 ～) 《FEELING-LOVE 白いポエジー》

○「仲の良い生き物」のようにも見える不思議なオブジェ。あなたは何に見えますか？兄弟？親子？なにか会話をしているようです。どんな話をしているのでしょうか？

14 ^{きむら けんたろう} 木村 賢太郎 (1928 ～) 《生成 3》

○雰囲気の良い作品が他にもありますね。「生成」という主題で作られた三つ目の作品です。ところで「生成」とはどういう意味なのでしょう？素材は硬い石ですが、よく見ると角に丸みがあって、形がふっくらと膨らんでいて、思わず触れてみたくなります。

15 ^{ぜろこま むさう} 零駒 無蔵 (1961 ～) 《過ぎし日のアパート》

○作者が、学生のときに住んでいたパリのアパートを思い出して作ったそうです。そのアパートも石できていたそうです。作品の周りをぐるっと回ってみると、中庭を取り囲むようにいくつかの建物が組み合わされています。天窓から屋根の上に出て、アパートや周りの景色を眺めることができたそうです。いつまでも消えることのない記憶。なつかしい思い出の詰まったアパートだったのでしょうか？

16 零駒 無蔵 (1961 ～) 《集う人々の列に…》

○全部で何人いるのでしょうか？（答えは10人です。）
○「嬉しい時、楽しい時、そして悲しい時も人はいつも大勢集まるものである。共に喜びあい、また悲しみはなぐさめあいながら生きていくのだと思う。そうして、同じ目的、同じ気持ちで集まった人達の列を個々の人間というよりも、一つの物としてとらえてみた。」
（※作者の言葉より）

17 ^{さかい りょう} 酒井 良 (1950 ～) 《時を刻む》

○石はそこにあるだけで強い存在感があります。ノミで刻んだ跡が粗いほど、重い感じがします。石の表面をよく見ると、夜空の星々のようにキラキラと光る雲母を見つけることができます。「時を刻む」という題名から、この石の生成に係る「時」に向き合い、作者固有の「時」をそこに重ねながら、制作していったのではないかと考えられます。

18 木村 賢太郎 (1928 ～) 《四つの姿 5》

○千葉県立美術館には「四つの姿」シリーズの作品が大・小あわせて五点あります。いずれも二つの塊が上下に交差して組み合わされているのが特徴です。これはその中で最も大きな作品です。

19 木村 賢太郎 (1928 ～) 《四つの姿 6》

○前後、左右と、四つの方向から作品を眺めてみましょう。それぞれ形はよく似ていますが、少しずつ違いがあります。18番の作品ともよく似ていますが違います。

20 木村 賢太郎 (1928 ～) 《生成 2》

○14番と同じ主題の作品です。形が単純化されていて、すっきりとしています。角を丸めて表しているところや形に膨らみを感じさせるところなど、共通するところがあります。

21 木村 賢太郎 (1928 ～) 《立像》

○《立像》というタイトルから、「人が立っている姿」を主題にして作られていることがわかります。頭部、胴体、足腰の三つの部分から成り立っていますが、それぞれの部分が、不完全な球体のように不思議な形をしていて、お互いがバランスをとって組み合わされているようにも見えてきます。

22 ^{おおすか つとむ} 大須賀 力 (1906 ～ 2009) 《浅井忠像》

○浅井忠は、明治時代の洋画の発展に大きな働きをした、千葉県佐倉市出身の画家です。千葉県立美術館には、約200点もの作品が収蔵されています。この彫刻を作った大須賀力は、29番の彫刻《椅子の女》の作者でもあり、穏やかで写実的な作風で、人物像を多く作っています。○この彫刻は、写真などで見る浅井忠本人にとってもよく似ています。

23 ^{ふじの てんこう} 藤野 天光 (1903 ～ 1974) 《ああ 青春》

○10番の彫刻の作者でもある藤野天光は、長崎の平和記念像を造った彫刻家北村西望 (1884 ～ 1987) に師事し、この作品のような力強い男性像を得意としました。
○両腕を閉じて上体を一塊とし、大きな「ねじれ」を作り出すことによって、若者の感情を迫力をもって伝えています。銅板の題字は、師の北村西望によるものです。

24 ^{やまざき えいこ} 山崎 英五 (1947 ～ 1982) 《地を這うものども XIV》

○決して大きくはないけれど、地に伏したまま動かないでいて、突然素早く動きだしそうな気配があります。黒く磨かれた石ですが、古代の生き物のような不思議な存在感を感じます。「地を這うものども」を主題にして作られた14番目の作品です。
○「昔、ソロモン王は、けものや鳥や魚、地を這うものどもと語ったという。今、私も彼らと語り、それを人々に伝えようと思う。」
（※作者の言葉より）

25 木村 賢太郎 (1928 ～) 《友達》

○作者の木村賢太郎が彫刻家になったのは、小学校の先生に勧められて工芸学校に進み、先輩に勧められて石彫をはじめ、最初に作った作品を友達が買ってくれたことが、きっかけだったそうです。
○さて、この作品から、どんな《友達》が見えてきますか？

26 ^{あおき さんしろう} 青木 三四郎 (1947 ～) 《憩い》

○《憩い》というタイトルから、幸せな家族の穏やかなひとときを主題にしたものと想像できます。顔や手などの細かい部分にとらわれずに、家族三人のゆったりと寛ぐ形や空間を大切にしています。
○台座を上げて、見る人がちょうど見やすい高さに設置されています。

27 ^{すずき ぶ えもん とおる} 鈴木 武右衛門 (徹) (1949 ～ 2014) 《帰雲・春》

○昔は立派だったのに、雨や風にさらされて、傷んでしまった古い彫刻のようにも見えます。これは8番で紹介したトルソです。もしも顔や手足があったなら、どんな作品になっていたでしょうか？
○タイトルの帰雲は岐阜県白川郷近くにあった古くからの地名で「かえりくも」と読みます。昔この地に帰雲城という城がありましたが、天正年間に地震による崩壊で一夜にして消滅したという言い伝えがあります。

28 木村 賢太郎 (1928 ～) 《海》

○千葉県立美術館の依頼によって制作された作品です。木村賢太郎の彫刻は26点収蔵されていますが、その中でもこれは最も大きい作品で、高さは3 m10cmあります。少し離れて眺めてみるのも良いですが、うんと近づいて、下から眺めてみることをお勧めします。タイトルの《海》を想像しながら鑑賞してみてください。

29 大須賀 力 (1906 ～ 2009) 《椅子の女》

○女性が椅子にもたれて座っているごく自然なポーズですが、人物、布、椅子といった異なる三つの要素を組み合わせで作られており、構成にとっても注意を払っています。
○緑がかった色は、ブロンズの錆にあたる緑青の色です。

30 ^{み き としはる} 三木 俊治 (1945 ～) 《行列》

○「目と手には不思議な力がある。小さい頃から目と手で不思議を探した。不思議を生み出すのは簡単ではなかったが、出来た時は興奮して眠れなかった。大人になっても不思議探しがしたかった。彫刻を始めたのもそのためだった。」（※作者の言葉より）
○人がたくさん集まって、行列を作っています。遠くから眺めた風景のようです。

31 ^{むつざき としはる} 六崎 敏光 (1938 ～) 《暖流》

○形を単純にして、直線と曲線によってできる曲面体で作られた彫刻です。写実的な具象彫刻に対して、抽象彫刻と呼ばれることがあります。
○じっと見てみると、足を伸ばして寛ぐ女性のようにも見えてきます。胸のあたりに空いた空洞を、暖かい風が通り抜けていくようです。